

学籍番号

氏名

括弧 () に適当な文字、数字、用語等を入れなさい (各1点)。

図1のMRI像は① (矢状) 面である。

頸部前方で上から② (舌骨)、甲状軟骨、③ (輪状軟骨)、気管の順で触れることができる。

舌の前2/3は④ (舌根) といわれ、知覚神経は⑤ (三叉(V)) 神経が分布し、運動神経は舌下神経が分布する。

図2で、Aは⑥ (二尖) 心房中隔、Bは⑦ (一尖) 心房中隔である。

右肺中葉は二つの区域からなり、気管支は ⑧ B (4) と ⑨ B (5) が入る (数字を入れる) 右肺中葉

Cantlie line は⑩ (portal) と⑪ (下大) 静脈を結ぶ線であり、肝臓を左右に分ける。

横隔膜は筋肉で、横中隔由来の⑫ (腹) 中心に停止する。

膈において、ダグラス窩に直接接するのは⑬ (後腹膜直) である。

核膜の本態は⑭ (粗面) 小胞体である。

上皮は細胞の形で3種類に分けることができ、そのうち、横幅と高さが同じなのが⑮ (立方) 上皮で、腎臓の⑯ (腎小管) の細胞はその典型的な例である。

図3は骨の光学顕微鏡像である。Obは⑰ (骨芽) 細胞、Ocは⑱ (破骨) 細胞である。Obは骨基質を作る細胞で、豊富な⑲ (粗面小胞体) を持つ。

10/5 ①



図1

11/2 ②

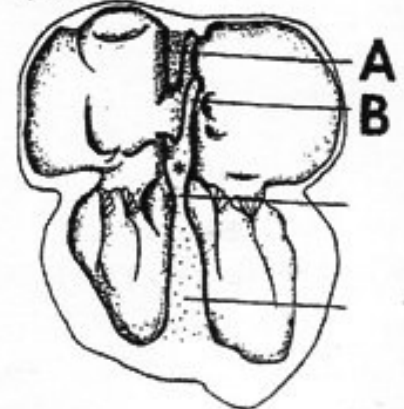


図2

11/11 ③



図3

弾性型血管は②①(中)膜に豊富な弾性板、弾性線維を含み、腹大動脈などはその例である。

血球成分の中で止血機構に関与するのは②①(血小板)で、核はもたない。

Weibel-Palade 顆粒は②②(内皮細胞)細胞に特徴的に見られるもので、含まれているものは②③(抗凝固)阻止因子である。

図4は動脈、静脈の光学顕微鏡像である。Aが24. (動脈)、Bが25. (静脈)である。

図5は心筋と特殊心筋線維の光学顕微鏡像である。Aが②⑥(心筋)、Bが②⑦(心臓)である。特殊心筋線維の特徴は②⑧(結合)線維が乏しいこと。

膠原線維は②⑨(タイプI (コラーゲン) から形成され、弾性線維は30. (エラスチン)とmicrofibrilからなる。

軟骨の中で椎間円板は③①(軟骨)線維を多く含む。

図6は男性膀胱を後下面から見たものである。Aは32. (尿管)、Bは33. (精管)、Cは34. (前立腺)で、Bの一部が膨らんだもの、Dは35. (精嚢)である。いずれも尿生殖隔膜、③⑥(骨盤筋)膜より上で、骨盤内臓に含まれる。

十二指腸下行部の腹側にあるのが③⑦(右)腎臓であり、下大静脈の腹側に存在するのは、脾臓の③⑧(胃腸部)である。

脾臓の上縁を脾臓に向かって走行するのが、39. (脾)動脈で、脾臓の頭部と頸部の境を下行し、上脾十二指腸動脈と左胃大網動脈に分かれる枝は④①(胃十二指腸動脈)であり、その本幹は④②(脾動脈)である。

図7のCTでAは、42. ()であり、Bは43. ()で、Cは基室より血液を運ぶ血管で④④()である。

肉柱の中で、心室中隔から前乳頭筋に連続し右室を橋渡しする構造が④⑤(中隔筋)で、その表層を刺激伝導系の④⑥(ヒス束)が走る。

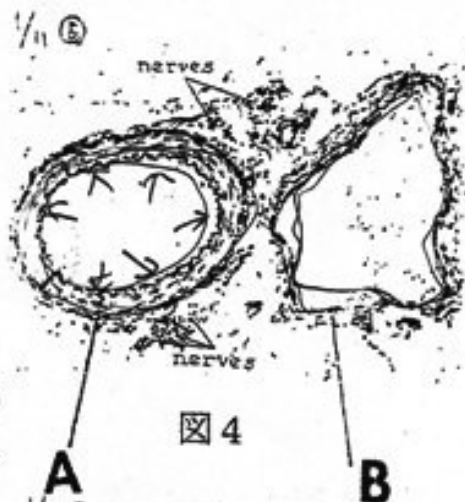


図4

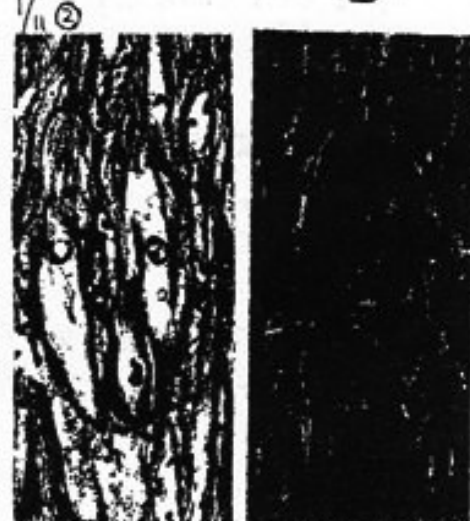


図5

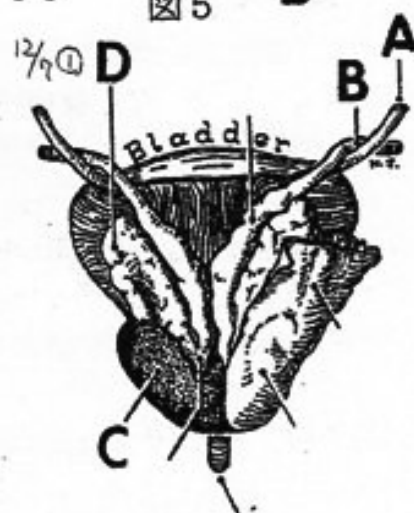
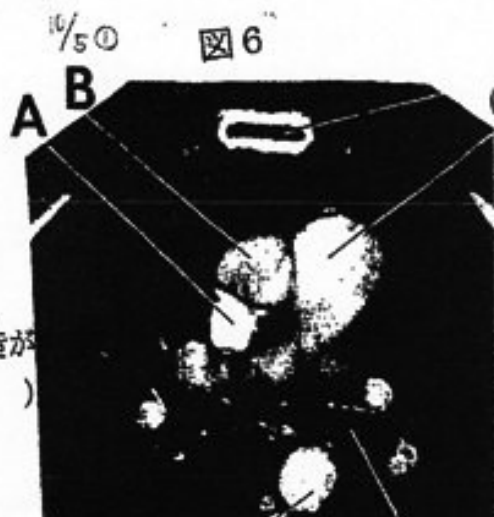


図6



① 第2鰓袋から ~~48~~ 口蓋 (高柱) 、第2鰓袋から ~~49~~ (胸腺) と上皮小体が形成される。

図8でAは 49. (棘) 突起、Bは 50. (横) 突起、Cは 51. (柱体) である。

内分泌器系には頭蓋のトルコ鞍に存在する 52. (下垂体) 、頸部気管の前に 53. (甲状腺) 、腎臓上極に近接して、54. (副腎) がある。

脾臓でPALSに 55. (T) 細胞、脾小節には 56. (B) 細胞が集積する。

骨格筋(横紋筋)筋線維には、刺激を細胞質内まで伝播させるための 57. (T管) という細胞膜の落ち込みがあり、さらにその刺激を受けてCaイオンを放出する 58. (筋小胞体) がある。

図9は吸収上皮の接着構造を示す。Aは 59. (接合帯) で、Bは 60. (接合斑) である。A、Bのうちアクチンフィラメントがつくのは 61. (A) である。

細胞小器官の中で、糖鎖修飾や振り分けを行うのが 62. (ゴルジ) 装置である。

男性の場合、下下腹神経叢(骨盤内臓神経と混じる部位)は 63. (直腸) の外側にある。

腎臓をつつむ結合組織の膜は 64. (線維性被膜) であり、脾臓と後腹壁、上、下結腸と後腹壁を境する結合組織の膜は 65. (膈胃膜) である。

肝臓は門脈の分布により 66. (8) 区域に分けられるが、そのうち第1区域は 67. (右葉) 、第4区域は 68. (左葉) である。

図10のCTで、Aは 69. () 、Bは 70. () 、Cは 71. () であり、transpyloric plane で横断した面である。

9割の人では右冠状動脈から、刺激伝導系の結節に分布する 72. (三洞結節枝) と 73. (房室結節枝) を分岐する。73は右冠状動脈が後ろに回った後、後室間溝の近くである。

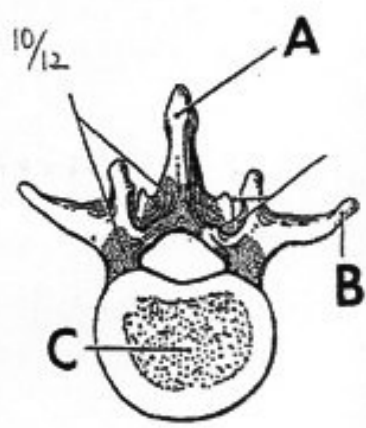


図8
10/12



図9

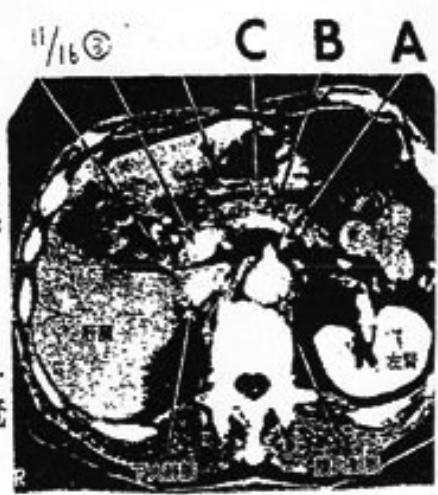


図10

唾液腺の中で、顎舌骨筋の上にあるのが74(舌下腺)、下にあるのが75(顎下腺)である。

胸骨体の後ろにあるのは心臓の76(右心室)である。

末梢神経には脳神経、77(脊髄)神経、自律神経がある。

図11でAは78(左肺動脈) Bは79(右肺動脈) Cは80(左肺動脈) 静脈で、右の気管支を乗り越えて、81(上大静脈)に入る。

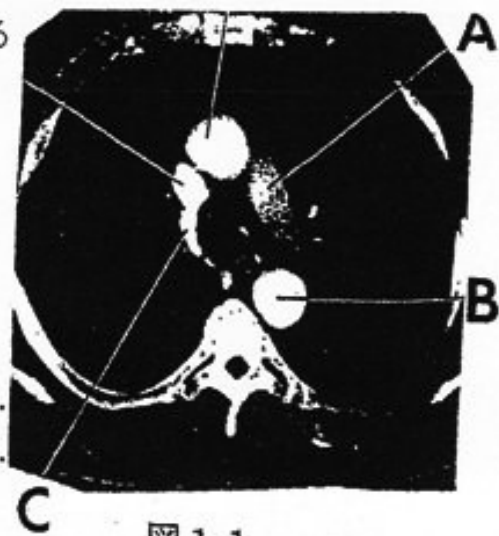


図11

図12は光学顕微鏡で見た顆粒球の像である。Aは好酸球で、Bは82(好中球)、Cは好塩基球である。



図12

横隔膜で食道が通過する部位を83(横隔膜食道裂孔)、大動脈が通過する部位を84(大動脈裂孔)という。

子宮頸部を骨盤壁に固定するのは85(子宮頸部)であり、その中を子宮動脈が走る。一方直腸を固定するのは86(直腸)で、その中を87(内臓)動脈が走る。

肝管と胆嚢管と合流した後の管を88(総胆管)といい、十二指腸、脾臓の背側面を下行した後、89(主腸)管と合流し、十二指腸下行部内の90(大十二指腸)に開く。

第7、8、9、10肋骨は結合し、91(肋骨)を形成する。

網膜孔は網膜の92(右)側に開き、脾臓は93(背)側にある。

図13は骨端軟骨における骨形成のプロセスを光学顕微鏡で見たものであり、Aは94(増殖)帯である。

食道の上1/2の腹側に95(気管)、下1/2の腹側に心嚢を介して96(心臓)がある。

大腸と小腸を区別するものに、97(盲腸)膨起、98(盲腸)ヒモ、99(盲腸)垂がある。98は100(盲腸)ではじまり、S状結がと直腸に移行する部位で終わる。

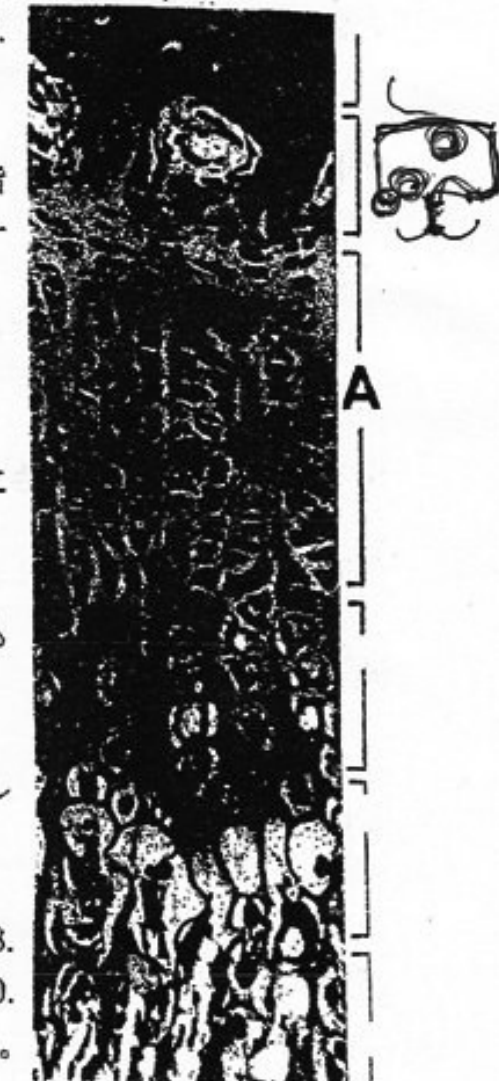


図13